

特別寄稿

「コロナ禍で『正しく怖がる』ことの難しさを痛感」

くらしとバイオプラザ21 理事 小島正美



新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている。日本ではそろそろ第二波に収束の兆しが見えてきたが、コロナ禍で痛感するのは「正しく怖がる」ことの難しさである。

「正しく怖がる」とは、簡単に言えば、小さなリスクに過剰に反応せず、冷静に行動することだ。たとえば、福島第一原子力発電所の事故から9年たち、いまでは福島産農産物から放射性セシウムはほとんど検出されない。なのに、福島産農産物を避ける行動は、どう見ても「正しく怖がっていない」行動だといえる。

ではコロナはどうか。日本では68902人（9月1日）が陽性となり、死者は1311人（同）。その死者数は米国や中国、ドイツ、イタリア、フランス、ロシアなどに比べて、100分の1～10分の1程度（100万人あたりの死者数）とはるかに少ない。同じウイルスで感染する子宮頸がんの年間死者は約3000人。季節性インフルエンザの死者は約3500人（2019年）。それらと比べ、コロナの死者は意外に少ない。いくら未知のウイルスとはいえ、一個人から見れば、過剰に恐れるリスクとはいいがたい。

ところが、今夏、岐阜県に住む一人暮らしの母（89歳）に会いに行けなかった。東京から来た人が母宅にいるのが近所に知れわたると冷たい視線で見られるというのが理由だ。冷静に考えれば、私が帰省することで感染するリスクは極めて低く、お盆に89歳の母に会う大切さのほうはるかに大きい。ならば、「3密」を避け、マスク、手洗いなどの行動をとるという条件を守れば、帰省することこそが「正しく怖がる」行動だと思うが、「世間の目」がその正しい怖がり方を許してくれない。

こうした世間の監視による同調圧力で、京都の祇園祭が中止になり、五山送り火が規模縮小になり、夏の夜空を彩る花火は全国で次々に中止になった。大学の授業はいまだリモートで大学の教室に一度も踏み入れていない新入生も数多くいる。妊婦が感染したら帝王切開で出産との声も聞く。さらに驚くのは、コロナで死亡した人が咳をするわけでもないのに、身内でさえ遺体に立ち会えず、灰になるまで死者に会えないという摩訶不思議な異常事態が延々と続いている。

どうみてもコロナ感染リスクを怖がり過ぎている。本来、個人個人が正しく怖がったうえで、リスクよりもベネフィット（経済的な有益性、文化や伝統的価値など）が上回れば、ベネフィットを選択するという西欧流のリスク論が成立するはずだが、そこに世間の目（同調圧力、日本独特の「空気」）が加わると、正しいリスク行動ができなくなることが分かった。正しく怖がることよりも、世間の目の影響力のほうが強いのだ。

いったんコロナで入院したら、だれとも会えずに死んでいく恐れがあるせいか、母は「コロナでは絶対に死にたくない」と言った。お祭り、花火、旧友や家族との再会、学校給食など、怖がり過ぎて失ったものの大きさをいま一度、考えてみる必要がある時期が来ているように思う。



プロフィール

食生活ジャーナリストの会 代表

1951年愛知県犬山市生まれ。愛知県立大学卒業。毎日新聞入社。松本支局などを経て、東京本社・生活報道部で主に食の安全、健康・医療問題を担当。生活報道部編集委員として約20年間勤務。原子力、遺伝子組換え、食品添加物など人々の暮らしのそばにあるリスクをめぐる課題をとりあげる。東京理科大学の非常勤講師などを兼務。「リスク眼力」「誤解だらけの遺伝子組み換え作物」「誤解だらけの放射能ニュース」「メディアを読み解く力」など、著書多数。

活動報告



コンシューマーズカフェ (6月23日)

2020年6月23日、くらしとバイオプラザ2 1では、初めてオンラインでコンシューマーズカフェを開き、遺伝子組換え食品やゲノム編集食品のリスクコミュニケーションをご指導いただいた、大阪学院大学 田中豊教授をお招きし、「リスク、うわさ、パニックとの心理学」をお話しいただきました。初めての試みでしたが、田中先生がスライドを示しながらわかりやすく、ゆっくりと話してくださったので、「先生の表情も見えて、大きな会場の講演よりもよかった」など、好評でした。

SFSSオンラインセミナー (6月28日)

2020年6月28日、食のリスクコミュニケーション・フォーラム2020「消費者市民のリスクリテラシー向上を目指したリスクコミとは」第1回「ゲノム編集食品～新たな育種技術のリスクコミ」(主催：NPO法人食の安全と安心を科学する会(SFSS))が開かれました。東京大学農学部フードサイエンス棟に関係者が集まり、オンラインで無観客シンポジウムを行い、60余名が遠隔参加しました。農研機構 田部井豊先生より、ゲノム編集をめぐる規制の状況、筑波大学 江面浩先生より、ゲノム編集技術を用いて開発された高GABAトマトと実用化に向けた状況について、説明がありました。くらしとバイオプラザ2 1からは、ゲノム編集技術を用いた食品をめぐる消費者とのコミュニケーションについてお話ししました。



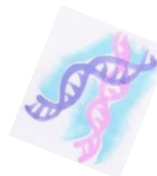
オンラインバイオカフェ (8月27日)

「新型コロナウイルス感染症って、どんな病気？」

東京大学医科学研究所先端医療研究センター四柳宏先生をお迎えして、この病気のこと、症状のこと、報道されない軽症・無症状の患者さんの生活について伺いました。正しく知って、落ち着いて暮らしましょうというメッセージをいただきました。喫茶店のように美味しいケーキやお茶はご提供できませんでしたが、全国からご参加いただくことができました。

中外製薬キッズバイオ (8月30日)

はまぎんこども宇宙科学館で、初めて実験教室「DNAをとりだそう」を行いました。三密にならないように定員も当初の半分に、アクリル板を置き、手指の消毒を徹底して行いました。低学年を対象とした親子参加の実験教室では、定員の10倍のお申込みをいただきました。食物からのDNAの抽出では、現在、品薄のエタノールを用いるため、従来、6-10ml使っていたものを1mlにして行いました。



オンラインキッチンサイエンス

2020年度に科学館などでの開催が計画されていたキッチンサイエンスは全て中止になってしまいました。調理は異なる家族がひとつの調理台で作業したり、試食したりするので、三密を避けることが難しいからです。

そこで、家にあるものを利用してできる、オンラインキッチンサイエンスを計画し、赤門小規模保育園、オフィスマキナの協力を得て、「カラーマジックゼリー（アントシアニンの色の変化を利用する）」と「水と油の仲良しケーキ（電子レンジでチョコレートケーキをつくり、乳化について学ぶ）」を行いました。材料の一部は事前に申し込んだ方にお送りしました。



8月22日
協力：赤門小規模保育園



9月26日
協力：オフィスマキナ

ステーキホルダー会議、「遺伝」で紹介される

「生命の科学 遺伝」5月号（2020年）にくらしとバイオプラザ21が考案・実施してきた、ロールプレイをとり入れたワークショップ手法「ステーキホルダー会議」に関する特別寄稿が掲載されました。「ゲノム編集技術を用いて開発されたソラニンの出来にくいジャガイモ（以下、ゲノム編集ジャガイモ）」をとりあげ、利用するかどうかを「生産者」「ポテトサラダ製造販売業者」「学校給食調理人」「消費者」の4つの立場になったつもりで（ロールプレイ）、考え、話し合うものです。サイエンスアゴラ2019の結果などを交えて報告しました。



これからのイベント

詳細はくらしとバイオプラザ21ホームページのイベント案内をご覧ください

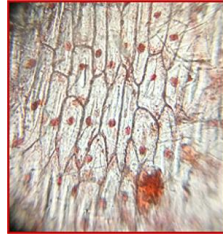
- 10月4日（日） 10:30～12:00 13:30～15:00 親子バイオ実験教室「紙の顕微鏡」
於 千葉県立現代産業科学館
- 10月11日（日） 14:00-15:30 オンライン 大人のバイオカフェ
「スポーツをもっと楽しむために“アミノ酸の科学”」講師 味の素(株)片山美和氏
参加ご希望の方は、多摩六都科学館WEBサイトよりお申込みください。
- 10月23日（金） 13:30～15:30 オンラインコンシューマーズカフェ
「食品添加物表示制度検討会をふりかえって～消費者にできること」
講師 （一社）全国消費者団体連絡会事務局長 浦郷由季氏
- 10月28日（水） 14:00-16:00 “未来へのバイオ技術”勉強会（ZOOMと会場参加）
「トマトのイノベーション part2」講師 筑波大学江面浩氏他
参加ご希望の方は（一財）バイオインダストリー協会へ
- 11月7日（土） 13:30～15:00 バイオカフェ 於 千葉県立現代産業科学館
「衛星の科学～日用品で新型コロナウイルスに立ち向かう」講師 花王（株）永井智氏
- 12月6日（日） 11:00～12:00 13:00～14:00 親子バイオ実験教室「紙の顕微鏡」
於 蒲郡市生命（いのち）の海科学館



紙の顕微鏡 親子バイオ実験教室 (8月8日)

2020年8月8日、ぐんまこどもの国児童会館で今年度初めての実験教室を開きました。新型コロナウイルス感染症対策として、参加者、スタッフは2週間前から検温し、体調が良好であることを確認して、参加しました。参加人数も昨年の半分にし、広い部屋で窓や扉を開けて換気をしつつ、手指消毒を行い、マスクを着用して行いました。午前、午後で、13組の親子が参加。時間短縮のために、紙の顕微鏡は、台紙からはずし、レンズ台にレンズを両面テープでとりつけた状態から組み立てをスタートし、次のことを行いました。

- タマネギの薄皮の細胞の核を染めた、紙の顕微鏡標本を自分で組み立てた紙の顕微鏡で観察する。
- この顕微鏡は、発展途上国のマラリア早期発見を目指してスタンフォード大学で発明されたことから、世界の人々の保健について考えてもらう。



講師派遣報告 2020年4月～2020年9月

- | | |
|--------|--|
| 4月15日 | 東京大学 講義「生命倫理」 |
| 6月26日 | 東京大学 講義「フードクリエーション」 |
| 7月17日 | 食の安全と安心を科学する会 リスコミフォーラム 講演
「ゲノム編集食品～新たな育種技術のリスクミ」 |
| 9月8日 | 東京テクニカルカレッジ専門人材未来会議 講演 |
| 9月22日～ | 東洋大学 講義「科学コミュニケーション特論」
講義「科学コミュニケーション演習」 |
| 9月29日～ | 神奈川工科大学 講義「科学技術と社会」 |



会員特典

私たちの活動を応援してくださる協力(個人)会員を(1口 2,000円～)常時募集中です。会員になるとイベントに関する情報が優先的に得られたり参加費が安くなることもあります。もちろん、バイオレター(紙媒体)もお届けします(2回/年)

編集後記：新型コロナウイルス感染症が拡大し、春から夏にかけて、多くの学校が休校になり、科学館は長く閉館になりました。大学では今でもオンライン講義が続けられています。

くらしとバイオプラザ21では総会および記念講演会が中止になり、実験教室は延期・中止になりました。もちろん、バイオカフェもできません。そんな中、私たちは、いろいろな注意をしながら実験教室やバイオカフェを再開することにいたしました。メカに強いスタッフはいませんので、参加者にお見苦しい、お聞き苦しい思いをさせてしまっていることと、お詫びいたします。しかし、やってみるとご無沙汰していた遠方の方が参加して下さったり、移動時間がないので、超多忙な講師にご協力いただくことができたり、face to faceで視聴できて集中できたという参加者のお言葉をいただいたり、残念なことばかりではありませんでした。秋にはオンライン実験教室にも力をいれていきます。バイオカフェもいたします。コロナとともにある日々は続きます。負けないで「いい所探し」をしながら、ご一緒にまいりましょう。

特定非営利活動法人 くらしとバイオプラザ21

<http://www.life-bio.or.jp>

編集 佐々義子・二瓶美郷

カット 中村典子

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町3-5-3

日宝茅場町ビル8階

電話：03-5651-5810

FAX：03-3669-7810

e-mail: bio@life-bio.or.jp

